南国ギャンブラー
～ 小倉競馬場遠征でよみがえる鹿大生時代のよき思い出 その２ ～

串田　達治

まさかまさかの炉ばたセイ談三度目の投稿である。

いつのまにか準レギュラー化されてしまった感があるが、いつも母がお世話になっている編集長からのお願いということもあり、今年も筆を執らせていただいた次第である。

様々な分野でご活躍されている諸先輩方の貴重な随筆・論文に混じって私のようなド素人が書いたいいかげんな文章が掲載されることに今でも不安を覚えるが、前回の焼肉の話に引き続き鹿大生時代の思い出シリーズ第二弾を是非最後まで楽しんでいただきたい。

なお、今回は私の唯一といってもいい趣味である「競馬」にまつわる話である。

・・・・・・・・・

私が競馬にハマった経緯というのは、中学生の頃同じ剣道部員だった友人が夏休みにうちに遊びにきた際、たまたま競走馬の育成シミュレーションを目的としたファミコンゲーム（いわゆるダビスタ）を忘れて帰ってしまったからという他愛のない偶然がきっかけだったのだが、和室にぽつんと置き忘れられた、見慣れないそのゲームを試しに起動してみると、画面には赤い屋根の小さな厩舎と一頭の

母馬が繋養された牧場を背景に、これまで一度も経験したことのない魅惑の世界が広がっていた。

さて、この運命の日から徐々に競馬ゲームにのめり込んでいった過程を物語にすると、それこそ一冊の本になってしまうためある程度割愛させていただくが、書店で見つけた種牡馬辞典やら攻略本等からゲーム攻略に必要な知識をどんどん仕入れたことで夏休みが終わる頃には「くしだ牧場」の経営は軌道に乗りまくり、馬主気取りで騎手に対して「先行しろって指示したのになんで後ろから行くんだバカヤロー！」みたいな悪態がつけるくらいにまで急成長した。

このようにすっかりゲームに慣れてくると、自分の指示に従わない架空の騎手どもにフラストレーションが溜まりすぎてしまい、ついに堪忍袋の緒が切れてしまった串田少年は、今度はプレイヤーが騎手となって愛馬を大レースに勝たせるジョッキーレースゲームをお年玉で購入し、ゲーム内ではあの武豊も足元に及ばないくらい数々の実在する名馬にまたがり、様々なレースに勝ちまくる伝説のジョッキーに生まれ変わったのである。

（ちなみに話が若干脇道に逸れるが、このジョッキーゲームがきっかけで乗馬にも興味がわき、鹿大卒業後に全国展開する某大手乗馬クラブに就職し、営業兼インストラクターとして三年ほど騎乗技術を学んだ経験があるため、実は私は本物のサラブレッドを操作して走らせることができちゃったりする。もちろん、今より体重が二十キロほど少なかった二十代の頃の話である）

地元の公立高校に進学する頃には現実の

競馬の世界にもどっぷり浸かり、日曜の午後三時にはほとんど毎週テレビの競馬中継を見るようになった。こうして学業がおろそかになってしまった私が当然のように一度目の大学受験に失敗した西暦二千年。この時代の日本競馬界にはのちに「世紀末覇王」と呼ばれる歴史的名馬が現役で活躍していた。

テイエムオペラオー

という名で馬名登録されたその栗毛の牡馬は、鹿児島にゆかりのある二人の人物と深い関わりがある。ともに鹿児島県肝属郡垂水町（現垂水市）出身の幼馴染であった竹園正繼氏と岩元市三氏である。

錦江湾を挟んで鹿児島市の対岸に位置し、桜島とつながった港町で生まれ育った二人の少年は、のちに馬主と騎手という関係で運命的な再会をはたし、やがて一頭の仔馬と巡り会う。

当時テイエム技研株式会社の代表であった竹園氏が北海道の浦河で見初めたその馬を、騎手引退後調教師として活躍していた岩元氏が預かって鍛え上げ、無事競走馬としてデビューさせたのだ。なんとドラマチックな話であろうか！まあこのあたりの知識はすべて私が昔読んだ競馬雑誌からの受け売りであることを申し添えておく。

そんなこんなで平成十年夏、私が勉強と部活そっちのけで競馬に熱を上げていた高校二年生頃であろうか。テイエムオペラオーは京都競馬場で新馬戦を迎え、一番人気に支持されるも勝ち馬に引き離されて二着に敗退する。華々しいデビューを飾ることはできなかったが、ケガもなく無事に競走馬生活をスタート

させた。

（ちなみにまたまた話が逸れるが、この時オペラオーに勝ったクラシックステージという馬は、競走馬引退後になんと私が就職した乗馬クラブに引き取られており、入社直後馬房でのんびり餌を食べている姿を偶然目撃してびっくり仰天した。普段の調教で何度か跨ったこともあるが、鞍上の指示に対して従順でとても乗りやすく、初心者向けの馬だった。そりゃこれくらい賢くないと、あっさり競馬に勝つ事なんてできないよなと妙に感心したものだ）

ところで、このテイエムオペラオー。競馬に興味ある人もない人も、その名前の響きをどう感じるだろうか。

馬主さんには大変申し訳ないが、かつてくしだ牧場の名オーナーだった（ゲームの世界で）私が初めてその馬名を聞いた時はオペラオー？なんじゃその名前は⁉と思ってしまった。

「テイエム」・・・馬主が経営する会社名から

「オペラ」・・・父オペラハウスから

「オー」・・・馬の王にという願いを込めて

そのまんまやないかい‼

自分だったらもっとカッコいい名前をつけるのに・・・と思ったものだが、このオペラオーがどんどん勝ち進み、競馬界隈で有名になるにつれて不思議とだんだん格好いい響きに感じられるようになった。このあたりは小栗のキャップや東海のテイオーや成田のブライアンらに通じるものがある気がする。

とにかくこのオペラオー。べらぼうに勝負強い上、抜群に頭がよかった。勝つときに常

に僅差だったのは馬が「勝った」と思ったらすぐ気を抜く賢さがあったからで、レースで必要以上の力を使わなかったからあれだけ長い間好調を維持し、活躍できたと騎手が述懐している。デビューしてからわずか八か月後には競馬の世界で一番格が高いグレードワン（ＧＩ）レースである「皐月賞」に優勝し、一気に世代トップクラスにまで昇り詰めた。

同時期、隣に競馬場があるからという理由で北海道大学を目指していた私だったが、いかんせん当時の学力では旧帝大挑戦などお話にもならず、せめて同じ道内の国立大学ということで単身はるばる十勝平野へ乗り込んで帯広畜産大学を受験したものの結果は不合格。なぜか北の大地は私を拒み続けた。

世間がミレニアム騒ぎに浮かれていた頃、受験戦争に完敗した私は心機一転大阪の予備校に通い、テレビ・携帯禁止の牢獄のような寮生活を送り、こっそりウインズ梅田（場外馬券売り場）に通いつつもそれなりに勉強した。次なる目標は日本で一番大きな競馬場が近くにある東京農工大。しかし不順すぎる動機がいけなかったのか、またしても不合格。府中の杜は目の前から遠ざかっていった。

そういったわけでなかばやけくそになりながら後期で鹿大農学部に出願し、なんとかかんとか進学できたのだが、競馬場はおろか、ウインズすら存在しない灰まみれの見知らぬ土地で失意を引きずったまま入学式を迎えた私はあきらかに浮いており、そこを合唱部の先輩に狙われた・・・という話は前号の炉ばたセイ談の冒頭にも書かせていただいたとおりである。

そのように私が何度も入試に負け続け、辛

酸をなめていた頃、この物語の主役であるオペラオーも身体がまだ若かったのか、皐月賞を勝った後五連敗した。しかし、年があけてから覇王はついに覚醒した。

四歳（人間に例えると成人くらい）になった平成十二年二月の京都記念から同年十二月の有馬記念まで通算八回もレースに出走しているが、そのすべてを一番人気で勝ち続けた。特に日本国内で一番格式が高く、レベルの高いＧＩ競走でもある

天皇賞・春　京都芝　三千二百ｍ
宝塚記念　阪神芝　二千二百ｍ
天皇賞・秋　東京芝　二千ｍ
ジャパンカップ　東京芝　二千四百ｍ
有馬記念　中山芝　二千五百ｍ

の五大レースを一年間で全部制覇したことがある馬は令和六年現在においても日本競馬史上テイエムオペラオーただ一頭だけである。ゲームの世界ですらめったにお目にかかれない不滅の大記録を現実世界の馬が達成してしまったわけだ。

さらに特筆すべきは、この五つのレースのうち、天皇賞・春を除いた残り四つのレースではすべて同じ馬が二着になったことだ。

メイショウドトウ

オペラオーに四連敗した準主役の馬の名であるが、名将怒涛。うん、名前的にはこっちのほうが格好いい。ただしこの馬はアイルランド生まれの外国産なので分かりやすく例えるとハワイ、オアフ島出身の曙みたいな感じだろうか。

つまるところ日本競馬の主要レースのうち、いつ、どこで、どの距離で、どんなメンバーと走っても必ず勝ったのがテイエムオペラオーであり、その腰巾着のように必ず二着になったのがメイショウドトウであった（ちなみにドトウは平成十二年の天皇賞・春には出走していない）。

これがどれほど天文学的な確率か説明するのは難しいが、要するに当時の日本競馬会ではオペラオーとドトウの二頭の実力が他の馬より一枚も二枚も抜きん出ていたのだろう。そして、いつもあとほんの僅かの差でドトウはオペラオーに届かなかった。

・・・・・・・

さて、前置きがずいぶんと長くなったがそろそろこの物語の本筋に入ることにする。競馬の楽しみ方は人それぞれだが、やはりそこは公営ギャンブル。売る側は必ず「勝馬投票券」と言い、買う側は必ず「馬券」と呼ぶ有価証券を買ってなんぼの世界であると私は思う。ただしこの有価証券は最初から二十五％の手数料を取られる上、ほとんどの場合は不渡りとなるのであしからず。

バブル崩壊から長らく続く平成不況の真っただ中。競馬の世界ではテレビ中継される大きなレースで特定の二頭がともに出走していた場合、当該二頭の馬券を買うだけで必ず儲かった時代が一年間続いた。もちろん、これまでずっと語ってきたオペラオーとドトウのことだ。

仮にメイショウドトウが伏兵として初めてオペラオーに挑戦した平成十二年の宝塚記念を除いたとして、前述した大レースの馬連（一着と二着に入線する馬二頭を当てる馬

券）の配当金は次のようになる。

①天皇賞・秋・・・⑬―⑮　四百九十円
（一着⑬オペラオー　二着⑮ドトウ）

②ジャパンカップ・・・⑧―⑬　八百十円
（一着⑧オペラオー　二着⑬ドトウ）

③有馬記念・・・⑦―⑬　三百八十円
（一着⑦オペラオー　二着⑬ドトウ）

当時未成年だった私は法律上馬券を買えないことになっているが、もしこの二頭の馬券をお小遣い千円で転がしたとすればどうなったか。

4.9×8.1×3.8×1,000＝150,822

なんとなんとこの三レースだけで十五万円の払い戻しである‼こんなに簡単に大金が手に入る財テクがかつてあっただろうか、いやない‼

いわゆる本命党と呼ばれる馬券師にとってこれほど安心して買える軸馬はいないし、もれなく同じヒモがついてくる。逆に穴党の馬券オヤジにとっては万馬券など夢のまた夢。ガチガチの銀行馬券が一年間続いたのだからそれはそれは地獄のような日々だったに違いない。

それでも欲にまみれた疑り深い大人たちは純粋にこの二頭の馬券を買い続けられたかどうか。前述したようにオペラオーはレースでぶっちぎる事はなく、勝つには勝つがいつも辛勝なのである。たしかに四回連続この組み合わせで決まったが、さすがに次はないだろう。そろそろ疲れも出てくるはず。次は大

敗するのではないか。どちらかが沈めば万馬券だ。この二頭ばっかりでおもしろくない・・・などなど。

しかし、あらゆる競馬雑誌を読み尽くし、オペラオーが最後まで全力で走らないことを知っていた私は、レースを見返すまでもなく、この二頭の実力が抜けていることを確信していた。この二頭を信じて買い続ければそれだけで儲かるのに‼当時インターネット投票が普及していなかったことが悔やまれて仕方がない。

鹿大に入学して間もない平成十三年四月二十九日は第百二十三回天皇賞・春が行われた。確か連休で家族が鹿児島に来ていたため、私もバスで市内から入来に遊びに行っていた。当然のように居間のテレビで競馬中継を見ていたら、ちょうどファンファーレが鳴り響いた頃に祖父もやってきた。

祖父「おお競馬見てるのか。何が勝つんだ」

私　「そりゃテイエムオペラオーでしょ。①番の白帽。ていうかこのメンバーならまず負けないと思う。で、二着は黄帽の⑤かな」

祖父「なんでそんなことが分かるんだ」

私　「その二頭が強いから、としか言いようがないけど、まあ三分後に分かるよ」

私のそれまでの競馬人生でこれほど単純かつ会心の予想はなかったかもしれない。

三分十六秒後、当たり前のように黄色帽子を引き連れた白帽子があっさりと勝った。

④天皇賞・春・・・①―⑤　五百円
（一着①オペラオー　二着⑤ドトウ）

祖父「おお～ほんとに勝ったな！すごいじゃないか。これは儲かったな。なに？賭けてないのか。何で買ってないんだ」

・・・神様、なんで鹿児島には場外馬券売り場がなかとですか?!

梅雨が明けた六月末。大学生活にも徐々に慣れてきて、所属する合唱サークルでは夏休みに県内各地の小学校を訪問し、演奏やオペレッタ（台詞と踊りのある歌劇）を披露する演奏旅行に参加することになり、西遊記のオペレッタで沙悟浄役を拝命した私が頭に皿をのせて発声練習に励んでいた頃。第四十二回宝塚記念の日を迎えた。

このレースではいつも負け続けていたドトウがついに王様に反旗を翻した!!のび太がジャイアンに渾身の一撃をお見舞いした貴重な瞬間を目撃したのである。過去五回連続の二着でもめげなかったドトウへの祝福か、レース後の観客からの温かい拍手が印象的だった。ただ、馬の組合せは変わらないのでもちろん馬連は最低配当。

⑤宝塚記念・・・③―④　二百十円
（一着③ドトウ　二着④オペラオー）

ここまで飽きずに読んで頂いた方は、いいかげんしつこいと思われるかもしれないが何度も繰り返して言う。前年の宝塚記念からまるまる一年間、ＧⅠレースで都合六度にわたって同一馬どうしによるワンツー決着が延々繰り返されたというのは日本競馬史において

も前例がない。

二度あることは三度あるどころの話ではない。ここまで結果で証明してしまえば、これはもう競馬の法則と言っても過言ではないのかもしれない。

ああ～一度でいいから競馬場で神に選ばれた二頭を生で見てみたい・・・

いや贅沢は言うまい。せめて場外馬券場のモニター越しにこの二頭を応援したい・・・

いやいや、どうせ場外馬券場に行くのならこの二頭の馬券を買って一刻も早く恩恵にあやかりたい‼

しかし、サークル活動の部費や飲み会代を払いながら残りのバイト代で競馬場はおろか県外のウインズに行くための交通費を捻出するのさえ当時の私には厳しかった（そもそも接客に向いてなかったため、下宿先からほど近い焼肉屋のバイトもすぐやめた）

抑えきれない煩悩を抱えながら無事演奏旅行も終わり、いざ鹿大祭に向けて準備を始めようとしていた平成十三年の秋、ついに、ついに千載一遇の機会が私の目の前に転がりこんできた。

同じ合唱サークルでほとんど話したことのなかった四年生のある先輩が実は隠れ競馬ファンであることが判明し、免許も車も持っているその先輩から今度の天皇賞当日小倉競馬場へ一緒に行かないかと誘われたのだ。

なんでもっと早く競馬好きって言ってくれなかったんですか先輩‼

天皇賞が行われるのは東京競馬場だが、競馬を開催していないローカル競馬場でも入場はもちろん、レースはゴール前の大型ビジョ

ンで観戦できる。当然馬券も購入可能だ。私が提唱する「ＴＭ（テイエム―メイショウ）の法則」を検証するため、むしろこちらから是非連れて行って下さいと懇願した。

有頂天になった私はサークルの同期や先輩たちに事あるごとに近々はるばる小倉競馬場へ遠征するので興味があったら代わりに馬券買ってきましょうか?と触れ回った。

競馬を知らない部員がほとんどだったので、私がこれまで延々書いてきた文章の内容そのまま「ＴＭの法則」の論理的整合性を懇切丁寧に説明し、徐々に信者を増やした。

「今度の天皇賞、あなたの資金を倍にしてさしあげます」

最終的にＴＭ教の教祖となった私は、後日詐欺で訴えられても文句の言えないような勧誘が功を奏し、バイト給料日前の金欠集団に囲まれ、残りわずかな生活費を託された。

かくしてサークルのみんなが元気玉よろしくオラに少しずつわけてくれた現金の一部をガソリン代として先輩に渡し、ありったけの夢を我がＴＭ教が崇拝する神・テイエムオペラオーと、その宿敵メイショウドトウにすべて捧げることにしたのだった。

平成十三年十月二十八日正午。鹿児島から四時間ほどかけて現地に到着した私は、初めて目にする競馬場の大きさに圧倒された。まさかこの場所が十数年後に自宅から最寄りのホームグラウンドになろうとは当時夢にも思わなかったが・・・

小倉までの道中は運転してくれている先輩や、前号の焼肉事件でも登場した栃木出身

の同級生（競馬好き）らと競馬の話で大変盛り上がったが、当然ながら天皇賞に関しては一切予想をしなかった。勝つのはオペラオーかドトウ、二着はオペラオーかドトウとＴＭ教の教典に書いてあるから。

二枠②番　メイショウドトウ
五枠⑥番　テイエムオペラオー

二頭の馬連オッズを確認すると、なんと三倍もついていた。この馬連②―⑥の馬券が的中することを信じて疑わなかった私は、先輩に帰りは天神あたりに寄って豪遊しましょうなどと提案したりした。

さあ、まもなくＧＩのファンファーレだ‼

レースが始まって以降の事は興奮しすぎたためだろうか、実はあんまり記憶に残っていないが、それでもモニター画面の真ん前で最後の直線、死力を振り絞って逃げるドトウを外からオペラオーが豪快に抜き去った時は心の底から震えた。やはり思った通りこの二頭だ‼オペラオーだ‼ドトウもがんばれ～‼うぉ～突き放した‼オペラオーつえ～～‼そのまま‼そのまま‼そのまま‼

そのまま‼

そのまま‼そのま・・・ん⁉だれ?だれ⁉
⑩番⁇だれやおまえ‼おい‼おいっ⁉
やめろ‼やめろって‼いやぁ～～‼

パパからもらったクラリネットをぶっ壊しちゃった時のような絶叫が競馬場に響いた。鼻と目から同時に出血したかと思ったが透明な液体だったのでおそらく鼻水と涙だったの

だろう。マジで憤死するかと思った。

⑥天皇賞・秋・・・⑥―⑩二千七百九十円
一着⑩アグネスデジタル
二着⑥テイエムオペラオー
三着②メイショウドトウ

この悪夢以来、競馬に絶対はない教に入信し、どんなに強い馬が現れても常にその実力を疑い、あらを探し、ケチをつけるようになった。しかしこの宗旨替えはタイミング的に最悪であった。そう遠くない未来において、ある馬に逆らい続けたせいで私は再び金銭的に大ダメージを被るはめになる。その最強馬、競馬界の至宝ディープインパクトがこの世に誕生するわずか五か月前の物語である。

（福岡県土地家屋調査士会　久留米支部
副支部長、炉ばたセイ談庵主の初孫）